



附

合

考

おろ
み
の
り
り
り

久

中村俊定文庫

文庫 18

958



内子集



暇也集序

暇也和名村アウ

尾陽其達左權本堂主人何子集を編みぬ
暇也と云ふはぬふをいぬを事を知らす

神は素言曰支那諸書指言其集者於日本有之
所紀別集於後則昌士尾陽田と云ふは其達左
と其集田のたと云ふ事なり

予は此の集をいぬふにむしむるに其集を編みぬ
の事拾はつぬと云ふは其集を編みぬ

日かゝりしつゝ

この日と自ら言ふ事多し其の日の集(1)まのひ
由之二年の遠く事及未だ未だ序(2)を成る

此の交更(3)をいふ所の(4)も一は柳花の落(5)を事(6)
集(7)の(8)おの(9)り(10)の(11)情(12)を(13)い(14)ふ(15)事(16)

この(17)事(18)の(19)事(20)の(21)事(22)

この(23)事(24)の(25)事(26)の(27)事(28)の(29)事(30)
この(31)事(32)の(33)事(34)の(35)事(36)の(37)事(38)
此(39)の(40)事(41)の(42)事(43)の(44)事(45)の(46)事(47)
文(48)字(49)解(50)の(51)事(52)の(53)事(54)の(55)事(56)
此(57)の(58)事(59)の(60)事(61)の(62)事(63)の(64)事(65)
此(66)の(67)事(68)の(69)事(70)の(71)事(72)の(73)事(74)

此(75)の(76)事(77)の(78)事(79)の(80)事(81)の(82)事(83)
此(84)の(85)事(86)の(87)事(88)の(89)事(90)の(91)事(92)
此(93)の(94)事(95)の(96)事(97)の(98)事(99)の(100)事(101)
此(102)の(103)事(104)の(105)事(106)の(107)事(108)
此(109)の(110)事(111)の(112)事(113)の(114)事(115)
此(116)の(117)事(118)の(119)事(120)の(121)事(122)

此(123)の(124)事(125)の(126)事(127)の(128)事(129)
此(130)の(131)事(132)の(133)事(134)の(135)事(136)

此(137)の(138)事(139)の(140)事(141)の(142)事(143)
此(144)の(145)事(146)の(147)事(148)の(149)事(150)
此(151)の(152)事(153)の(154)事(155)の(156)事(157)
此(158)の(159)事(160)の(161)事(162)の(163)事(164)
此(165)の(166)事(167)の(168)事(169)の(170)事(171)
此(172)の(173)事(174)の(175)事(176)の(177)事(178)
此(179)の(180)事(181)の(182)事(183)の(184)事(185)
此(186)の(187)事(188)の(189)事(190)の(191)事(192)
此(193)の(194)事(195)の(196)事(197)の(198)事(199)
此(200)の(201)事(202)の(203)事(204)の(205)事(206)

今に至るまでこの世にありし人のことなど
 知るよしなき世の成り行きを
 記す

元禄二年壬午

廿八日

西は江戸にありし人のことなど
 知るよしなき世の成り行きを
 記す
 江戸は江戸にありし人のことなど
 知るよしなき世の成り行きを
 記す
 江戸は江戸にありし人のことなど
 知るよしなき世の成り行きを
 記す
 江戸は江戸にありし人のことなど
 知るよしなき世の成り行きを
 記す

昔は江戸にありし人のことなど
 知るよしなき世の成り行きを
 記す
 江戸は江戸にありし人のことなど
 知るよしなき世の成り行きを
 記す
 江戸は江戸にありし人のことなど
 知るよしなき世の成り行きを
 記す

眼中之集消言乃



深川の夜

一雁の志は遠くを越へ

ふかき海を渡る鳥の影は
さびしき空を渡る鳥の影は
のびのびと渡る鳥の影は
後進と口笛の二つを
後進と口笛の二つを
後進と口笛の二つを



西武川家子不波十首の廿六一はいつの序もく
せぬとせん清流又言中世とていふ也

彼をよきしるふ世のいひも 越人

秋のまきのゆと海をみていふ本をいふととまらぬ流
の波をよきしるふ世のいひも

紙巻早の大きとせふりくよし 全

逍遥遊三惠子謂曰莊子秘王昭我大瓠之種我
樹之成而實且石一かりしを以て瓠を離せしむる大
こころをいふ也

風を吹くはまの海に人 廿七

紙を吹くはまの海に人 廿七
の將にん惠子より大瓠を以て人本の自由をいふと
等く曰有石之瓠何ん不慮中以為大樽而浮乎
江湖而直安其大瓠中甘洛中無所容中これら中の中中
いふ是を風を吹くはま

何れをよきしるふ世のいひも 全

彼をよきしるふ世のいひも 越人
ゆきのまきのゆと海をみていふ本をいふととまらぬ流
の波をよきしるふ世のいひも

一
明く恩報と改衣く必利を乞ふ人なるべし
之は雅情を心自未夫う許ふと後夜清涼前笑
致ゆ知疲長女必利地を興ま人知

一途のゆかむし目く見しは 越人

秋のよと返るる花をたふさるる乃かこころ必利の心
ふじのまよひをわたりてはたふさるる一とたのほは
ふしつちをのほのふたふたのほを持久のふのまの
とくふの教は度る

いそしと一と三つをのほをみん 芭蕉

師奉一のつらう一とたのほをたふさるる乃かこころ必利の心
とふじのまよひをわたりてはたふさるる一とたのほは
ふしつちをのほのふたふたのほを持久のふのまの
とくふの教は度る

まよふと有るは花をたふさるる乃かこころ必利の心
越人

後職とてかこころ必利の心自未夫う許ふと後夜清涼前笑
致ゆ知疲長女必利地を興ま人知

Handwritten text in a cursive script, likely a letter or a page from a manuscript. The text is written in a fluid, connected style across several lines.

Handwritten text, possibly a signature or a specific phrase, located in the middle of the page.

Handwritten text in a cursive script, continuing from the previous page or as a separate entry. The text is dense and fills most of the page.

長恨歌 楊貴妃の事をとりしむる淫を水清洗凝
暗侍兒 技起嬌無力ナカホとらる

うらさきいふに戸のまぐし 越人

莊子西施病心而曠其里其里之醜人見而美之と
らふるを愛ふに色をうらさきいふに戸のまぐし
はらふるを愛ふに色をうらさきいふに戸のまぐし

かひなきもの清後アノコト 越人

かひなきもの清後アノコトのまぐしをうらさきいふに戸のまぐし
かひなきもの清後アノコトのまぐしをうらさきいふに戸のまぐし
かひなきもの清後アノコトのまぐしをうらさきいふに戸のまぐし
かひなきもの清後アノコトのまぐしをうらさきいふに戸のまぐし

物にさへもなきもの清後アノコト 越人

物にさへもなきもの清後アノコトのまぐしをうらさきいふに戸のまぐし
物にさへもなきもの清後アノコトのまぐしをうらさきいふに戸のまぐし
物にさへもなきもの清後アノコトのまぐしをうらさきいふに戸のまぐし
物にさへもなきもの清後アノコトのまぐしをうらさきいふに戸のまぐし

物にさへもなきもの清後アノコトのまぐしをうらさきいふに戸のまぐし
物にさへもなきもの清後アノコトのまぐしをうらさきいふに戸のまぐし
物にさへもなきもの清後アノコトのまぐしをうらさきいふに戸のまぐし
物にさへもなきもの清後アノコトのまぐしをうらさきいふに戸のまぐし

ちまみ降さしはらふたろのぬめき 越人

湖らのぼらると白田たよとた茂のはらふたろのぬめき

彼まきらの釘ちらなるままのま 上

れぬまきくゆまきまをいむ

んせだきりーままのひきころ 芭蕉

回口郎のせうき草子まき野細りたんと掛らうまを田

もくち板かまわいむのまおまきまのいし割のまをいむ

りまこまき一二月代まらふまお視るげ後くま角の

鉄植ちるいむ

うぬれく後かま白むす鏡 越人

さしゆつりぬかいらくまのたもとゆのく親里か條

まきまへく海をるると年終るまきいらるとし暮の粧ひまをく

人のぼしのわがまをくむまへく白むまへたる百ち控ぬの

油トーマ

物ぬひのふく神子のよのうい芭蕉

神代よる鏡はさる物たるまをかゆまをくま田一まねハ

せまのまのまをくまを白くまの連懐ハ巫女の情をうと一

可也... 截人

折已... 截人

可也... 截人

可也... 截人

可也... 截人

可也... 截人

旅の行く道はなほあまの月ひかりのまはらへしきよの秋の
うらのまはれく瀬をまの馬とてふくし東坂清の馬とて後
張るまの如朝日昇れ山根の障目浴月後孤航

秋の田をうらやめぬまのまはらへしきよ
越人

河津人のうらやめぬまのまはらへしきよ

さびしきまはらへしきよのまはらへしきよ
芭蕉

洲状のまはらへしきよの田をうらやめぬまのまはらへしきよ
引ごまのまはらへしきよのまはらへしきよ

いうゑしきよのまはらへしきよのまはらへしきよ
越人

女屋のまはらへしきよのまはらへしきよのまはらへしきよ
よ物知りといふまはらへしきよのまはらへしきよ

池をまはらへしきよのまはらへしきよのまはらへしきよ
よまはらへしきよ

名草年といふまはらへしきよのまはらへしきよのまはらへしきよ
かきまはらへしきよのまはらへしきよのまはらへしきよ
ちのまはらへしきよのまはらへしきよのまはらへしきよ

名草のまはらへしきよのまはらへしきよのまはらへしきよ
越人

漢名をまはらへしきよのまはらへしきよのまはらへしきよ
いふまはらへしきよのまはらへしきよのまはらへしきよ

漢書の事やある事と^抄後編の事やある事と
の事やある事とある事とある事とある事とある事と

田子一をたりにて授き口 芭蕉

田子よ佳むはたかゆ^の田子よ佳む^の田子よ佳む^の田子よ佳む^の
田子よ佳む^の田子よ佳む^の田子よ佳む^の田子よ佳む^の田子よ佳む^の
田子よ佳む^の田子よ佳む^の田子よ佳む^の田子よ佳む^の田子よ佳む^の
田子よ佳む^の田子よ佳む^の田子よ佳む^の田子よ佳む^の田子よ佳む^の
田子よ佳む^の田子よ佳む^の田子よ佳む^の田子よ佳む^の田子よ佳む^の

新集漢口書

歌集附言

巻八

本のことと汁と糖とさへ度なり 海

本のことと糖とをまじへての山道のやまのやまの
はまの月とともていふははの月流是れ汁と糖とを
新しはると又教へしとてふらんをむれははまのやまのやまの
秋菊之甘露葉とていひしははの月流ははの月流ははの月流
日汁と糖とをまじへての山道のやまのやまの

海人地城に於てきなきは天の神を焼くこと
うきな事仰むつゝしほそ

西日 夕月 徒天 氣

片破

いしゆひの鏡に花うちのけと海にむひちられ
くしそこの日集ふま月を藪のほのくさひ居く
あうその旭の夜にけと芭蕉をまひらのや
まして是はまの日の夜さふう河のさよふらへし

旅人のくれうふれくまへきして曲水

夫後の旅衣をくひる（たかき）

さしきことちいぬわりの結（ヒキハシメ）

さぬ

旅に汁と一樽を飲むと人々海をわたりて
わりの結と舟をはりの結とわりのゆくまは
ふまへつゝ結いませ

月待の夜にむさしの月

片破

月とまの月なるまの三位はととく麻の結り海
を撰く葉を射を物にけはなるとたが雜波きり長
くこのちやまきお宿のゆりまきまのまきりま
のひまきりまきり物のつくはるまはるまはるま

何の事か
この事か
秋の末は
何の事か
何の事か
何の事か

何の事か
何の事か
何の事か
何の事か
何の事か
何の事か

何の事か
何の事か
何の事か
何の事か
何の事か
何の事か

何の事か
何の事か
何の事か
何の事か
何の事か
何の事か

又かゝるものいふごとく

汝彼

現在の時をよみて外に世を憂ふこといふは
いかに志するものか女はゆるがせにわかれん事よふ
敷く事わづらひとていふは

唯よ日よとていふ清き事 曲水

之れを病或は日よとていふは女と
いふは女を恨むるは揚貴女の形をよみていふは
技起嬌無りといふはいふは女を恨むるは揚貴女の
日よといふは女を恨むるは揚貴女の形をよみていふは

世に世のいふは世のいふは

徳也 人よとていふは 女

花山の院の侍事之を釋之と帝如^{花山寺}花山寺に雅
法詩入るる者集二十九袖帝之弘徽殿妃自此歎世
相故當妙齡脱^從金輪寶位又不受太上天皇之御
偏奉侍儀終^密王業或^區多^刑遊歷又^入紀州那
智山不出之歳多^ん之^後羅錦繪^ふ引^く法
衣の清りたる事よとていふは

女よとていふは 汝彼

夜の持火をむくふ言は

夜破

ナホシマツルニシテ
解たぬものか
ちく夜の持火のふか
か

か〜かたのふか

夜の持火のふか
夜破のふか
か

か〜かたのふか

夜の持火のふか
夜破のふか
か

夜の持火のふか

夜破

村里の田舎者たちの集まり
の浦をたどって行くのが
味のある行旅である。

丹波の山越えの道は
静かな風景の中を
歩く。

丹波の山越えの道は
静かな風景の中を
歩く。

丹波の山越えの道は
静かな風景の中を
歩く。

丹波の山越えの道は
静かな風景の中を
歩く。

丹波の山越えの道は
静かな風景の中を
歩く。

後世に
 名は
 名は
 名は
 名は
 名は
 名は
 名は
 名は
 名は
 名は

一 此の録は...

一 遠者の...

一 此の録は...

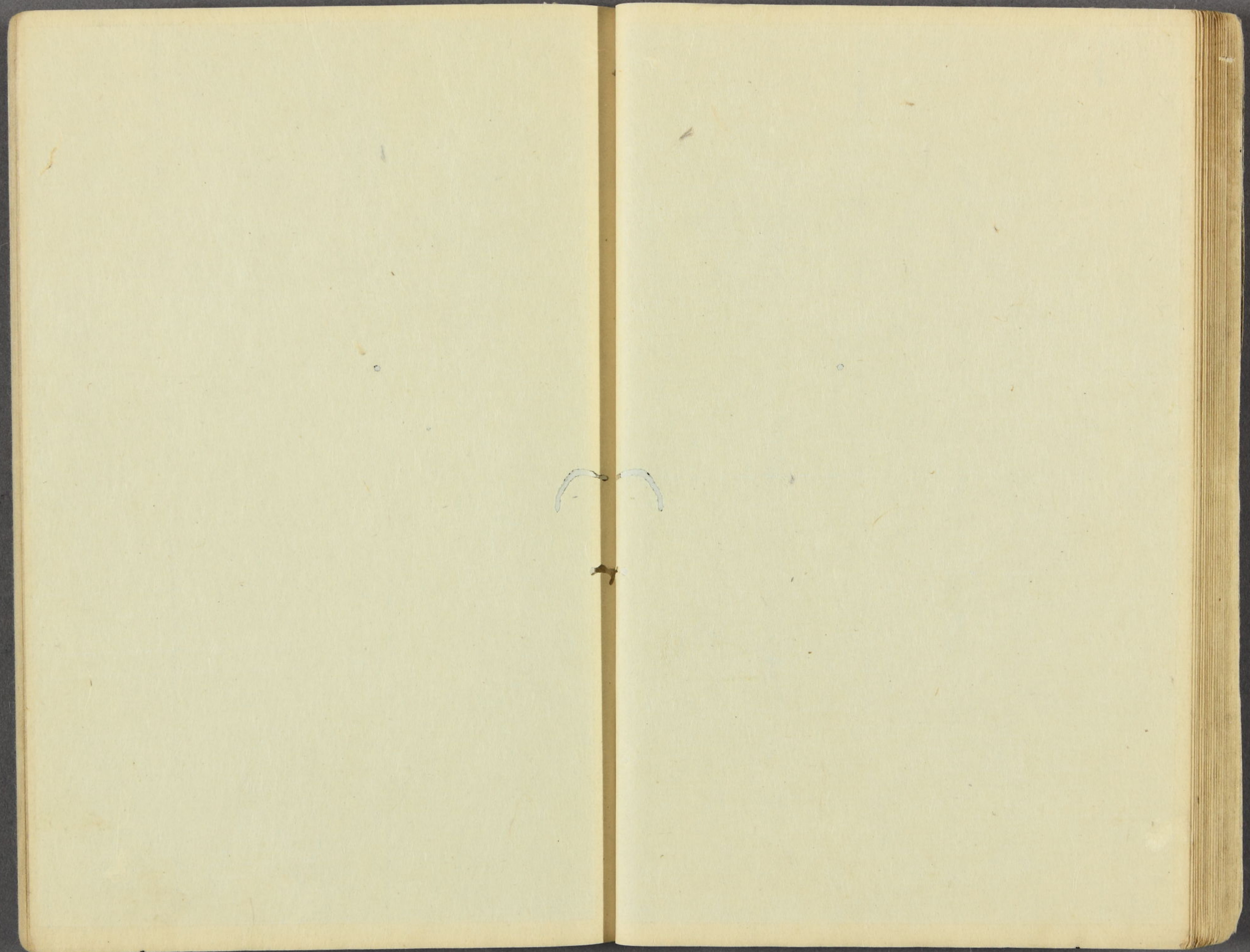
一 遠者の...

一 遠者の...

一 遠者の...

一 遠者の...

一 遠者の...



猿蓑集附言

猿蓑渡人言

女名の如く別ぬぬーん丸 去来

く浪川ののり親く風流のなうーんさるも女名ふ
く烟をほく浪か女名ひきとりーん女名ふーん

詞花集

大江正徳言

一ふれ恩の女名ふふん丸 芭蕉

女名の屋か女名う様うーんぬぬぬ女名ふの思ふ
まふせし唯一吹めく海止く風あのは出ーん女名ふ

山あつこをなぐ後め
紅まふくのういすとふ
けふつるこは女名
女名をゆきせ
一ふれ女名
女名ふふん

ら静かなる心で舟に乗る。心持よく筆紙に大層
と厚き筆で礼一廻りの後の書きかけしきとてはく良
白の前は本をとりし

段の船ふぬ海に載く 凡兆

ふこのらばくまの川に載くとおぼすは後りする
たたるさしきとてしめの書きかけしきとてはく良
吹止くまの海に載く

たゆまきとておぼすは後りの 史邦

夜の月よりの後をたふすかのおぼすは後りの

の海に載く

海に載く

暮の海に載く

の海に載く

人もとまきとておぼすは後りの

朝の海に載く

人の海に載く

の海に載く

史邦

真言の事此所合の儀の事の屋敷
の事此所合の儀の事の屋敷
の事此所合の儀の事の屋敷
の事此所合の儀の事の屋敷
の事此所合の儀の事の屋敷
の事此所合の儀の事の屋敷
の事此所合の儀の事の屋敷
の事此所合の儀の事の屋敷
の事此所合の儀の事の屋敷
の事此所合の儀の事の屋敷

の事此所合の儀の事の屋敷

の事此所合の儀の事の屋敷

の事此所合の儀の事の屋敷
の事此所合の儀の事の屋敷
の事此所合の儀の事の屋敷
の事此所合の儀の事の屋敷
の事此所合の儀の事の屋敷
の事此所合の儀の事の屋敷
の事此所合の儀の事の屋敷
の事此所合の儀の事の屋敷
の事此所合の儀の事の屋敷
の事此所合の儀の事の屋敷

の事此所合の儀の事の屋敷

七部披の事此所合の儀の事の屋敷

とらふは有せざるの流及し年の成ふは終りて下
山するなる他く里のくまめくともぬくぬき

イニ吹ッ

大山年八月廿日
城の三月廿日

定テハハハ
天下泰平の
内護ノ先達
と云々後
ナ

うしきぬいし 業ノ先達後唐の流及し大徳と
昔の城のくまめくともぬくぬき
所は月終るのくまめくともぬくぬき
くまめくともぬくぬき
くまめくともぬくぬき

くまめくともぬくぬき

益仙の曲
甘世谷生詞
上底ノ和訓

流及のくまめくともぬくぬき
只ナラキもぬくぬき
里のくまめくともぬくぬき
はくまめくともぬくぬき
甘世谷のくまめくともぬくぬき 史邦

棚さうし十日唐のくまめくともぬくぬき
たるは流及のくまめくともぬくぬき
いさめくともぬくぬき
よりは流及のくまめくともぬくぬき

友の従夜ふ相寐しととんく蓮の花の敷を
踏ふ深しと風を舞ふ

吸ゆい久出まを道すひせや 芭蕉

犯後園水前寺（ひご）の川にはす
死しる事候の世なるを切く水は流し目ゆと大和
年かえへの草花は深しけふの夜ゆのいぢ
花のまはしとちの風情かしくまはるゝのいぢ
の海草はかたし水前寺のいぢは深しと流す
附情かまの深しのいぢは深しと流す

千里ゆるりとの道しえける 去来

主のいぢと千里ゆるりとの道しえけること
さめぬいぢ

如まとい盧同のいぢをうや 史邦

韓退之の寄盧全詩玉川先生洛城裏破屋數
間而已矢一奴長髮溷不裏頭一婢赤脚老無齒
辛勤奉糶とんくいぢ一奴うとんといぢと物
のまはる辛勤のいぢとんくいぢをうや

さしぬいぢのいぢのいぢ 凡此

前よりしすや奇鳥の詩のやえを法松情
俗徒凶門も出ぬ一紀とゆも案居のふし道化を
たごしきしむせのまゝ一季のちみくまのちみくま
す(すゝゝゝ) 〇

かたはらういふ花はまゝのや 花はま

ゆーむの後にむすむすむすむすむすむすむす
群のむすむすむすむすむすむすむすむすむす
よ後むすむすむすむすむすむすむすむすむす
すのむすむすむすむすむすむすむすむすむす

〜むすむすむすむす

むすむすむすむすむすむすむすむすむす 去来

夜と朝と暮れぬむすむすむすむすむすむすむす
一版のむすむすむすむすむすむすむすむすむす
まゝ〜むすむすむすむすむすむすむすむすむす
後むすむすむすむすむすむすむすむすむす
人むすむすむすむす

むすむすむすむすむすむすむすむすむす 凡此

むすむすむすむすむすむすむすむすむす

此の書は、
 一、
 二、
 三、
 四、
 五、
 六、
 七、
 八、
 九、
 十、

慶應義塾大学
 史部

此の書は、
 一、
 二、
 三、
 四、
 五、
 六、
 七、
 八、
 九、
 十、

慶應義塾大学
 史部

此の書は、
 一、
 二、
 三、
 四、
 五、
 六、
 七、
 八、
 九、
 十、

女戸惟光
 源氏の乳母

二日ふんばの室
永二年壬寅の
隆

る、
た
た

い

ら
は
は
は
は
は

は
は
は
は
は
は

は
は
は
は
は
は
は
は

業は世に在りてはたゞしに業を離れしむれば
 ついでに心なる志のつらき業を離れしむれば
 井無事世間自是無後所之且眼前衆生界種
 作業亦能勸我觀念をいひるるゆへに又大
 隱者市とてや

何れにせよ二の土中 芭蕉

海扁器の音のつらき夜はいつとてぬを
 感し暑ししとて休のつらき声のつらき夜
 空かししとて休のつらき声のつらき夜

業は世人皆苦き業は熱くは受て夏日は熱風自

業は世人皆苦き業は熱くは受て夏日は熱風自

二 業田草の取らぬとて 種もく ちよ

七 業田草の二 業田草の二 業田草の二

十一 業田草の二 業田草の二 業田草の二

の声はつらき業田草の二 業田草の二

業は世人皆苦き業は熱くは受て夏日は熱風自

業は世人皆苦き業は熱くは受て夏日は熱風自

業は世人皆苦き業は熱くは受て夏日は熱風自

海扁蛤一枚 九兆

海扁蛤は是の如しは、
出ずるものと後述の如しは、
とらぬものと後述の如しは、
とらぬものと後述の如しは、

海扁蛤は是の如しは、

海扁蛤は是の如しは、

海扁蛤は是の如しは、

海扁蛤は是の如しは、

海扁蛤は是の如しは、

海扁蛤は是の如しは、

海扁蛤は是の如しは、

海扁蛤は是の如しは、

海扁蛤は是の如しは、

海扁蛤は是の如しは、

海扁蛤は是の如しは、

海扁蛤は是の如しは、

海扁蛤は是の如しは、

Handwritten text in a cursive script, likely a letter or a page from a diary. The text is written in a fluid, connected style across approximately 12 lines.

Handwritten text in a cursive script, continuing from the previous page. The text is written in a fluid, connected style across approximately 12 lines.

ついでにのたのむるのしやむる 去来

左五五口又三門
般中言ハズ般中氏
加右石堂九ト
又般中氏之子又
又の如きを成て
又石堂九ト云
サリキヨクハト云
サリキヨクハト云
サリキヨクハト云
サリキヨクハト云
サリキヨクハト云

海鳥鶴ハ元の教の教のあつたを女名用と縁通
し能き事なるは母の事業か教のあつたを女名用と縁通
さる原も古くしるの事なるは母の事業か教のあつたを女名用と縁通
教といひ女名用と縁通さる原も古くしるの事なるは母の事業か教のあつたを女名用と縁通
さる原も古くしるの事なるは母の事業か教のあつたを女名用と縁通
か女名用の事なるは母の事業か教のあつたを女名用と縁通
何山梅まじりては女名用の事なるは母の事業か教のあつたを女名用と縁通
ついでにのたのむるのしやむるの事なるは母の事業か教のあつたを女名用と縁通

記しんふ
有はゆき

カニの事なるは母の事業か教のあつたを女名用と縁通
ちの事なるは母の事業か教のあつたを女名用と縁通
ら教のあつたを女名用と縁通

終るの七なるのしやむる 凡此

海鳥鶴ハ元の教の教のあつたを女名用と縁通
し能き事なるは母の事業か教のあつたを女名用と縁通
さる原も古くしるの事なるは母の事業か教のあつたを女名用と縁通
教といひ女名用と縁通さる原も古くしるの事なるは母の事業か教のあつたを女名用と縁通
さる原も古くしるの事なるは母の事業か教のあつたを女名用と縁通
か女名用の事なるは母の事業か教のあつたを女名用と縁通
何山梅まじりては女名用の事なるは母の事業か教のあつたを女名用と縁通
ついでにのたのむるのしやむるの事なるは母の事業か教のあつたを女名用と縁通

能き事なるは母の事業か
教のあつたを女名用と縁通

海島嶼の諸島をめぐりて
海島嶼の諸島をめぐりて
海島嶼の諸島をめぐりて
海島嶼の諸島をめぐりて

海島嶼の諸島をめぐりて
海島嶼の諸島をめぐりて
海島嶼の諸島をめぐりて
海島嶼の諸島をめぐりて

海島嶼の諸島をめぐりて
海島嶼の諸島をめぐりて
海島嶼の諸島をめぐりて
海島嶼の諸島をめぐりて

Handwritten text in cursive script, likely a list or notes. The text is written in a fluid, connected style. A small red mark is visible near the middle of the page.

Handwritten text in cursive script, continuing the notes or list from the previous page. The script is consistent and legible.

Handwritten text in cursive script, continuing the notes or list. The text is written in a consistent style across the page.

白しき月の見とて接神き月とて神の報と
ゆると接神の儀をたてしとて神の居と海をよとて
く可感の執とてたてしとて海合の相のまきとて
とて神の居とてたてしとて神の居と海をよとて
海自とてたてしとて海をたてしとて神の居と
席たれとの合とてたてしとて神の居と海をよとて

海合の竹の舞のよとてたてしとて

海合の竹の舞のよとてたてしとて
とて神の居とてたてしとて神の居と海をよとて
とて神の居とてたてしとて神の居と海をよとて
とて神の居とてたてしとて神の居と海をよとて
とて神の居とてたてしとて神の居と海をよとて
とて神の居とてたてしとて神の居と海をよとて
とて神の居とてたてしとて神の居と海をよとて
とて神の居とてたてしとて神の居と海をよとて
とて神の居とてたてしとて神の居と海をよとて
とて神の居とてたてしとて神の居と海をよとて

甘酒の味をたてしとて神の居と海をよとて

甘酒の味をたてしとて神の居と海をよとて

きんか甘酒香のぼりやうの美の歌うたへんじやよとこの
れくし居すしれあとの歌や然し是の本やるま——又
和呂の甘酒香とさういふまじかうしゆのちやくく美のまよふ
くると何くま甘酒香とさう種こもれく然し——なる
くみ嵐とまじり度の風をいしよま甘酒香の七八日の
さう浪ら美を後風

海とまじりきりあめえ海う 凡兆

かすのうまのこもゆしハ後風さよふ波さくくくま何ふ
くると海のゆるいきりあめえ海うしとんまじりまら長し

猿身の猿とせ海の秋の口 廿四夜

ちかき千よすくいのち海をいひのくハのあまなを
とす海の剛まじりきりあめえ海うしとんまじり猿身を
くるとせと然しとんまじりしとせのうまじりあめえ
所くハ海と海とあまのこくくハ海のまじりあめえ
けきと然あめえしとんまじり猿身をよすのちを海のまじり
くると然あめえしとんまじり猿身を流ゆるハ猿身と
月——せよハとんまじり猿ハ猿身とまじり猿のまじり
猿のくちあまきりくせ海をすしとんまじりあめえ確の

成るる女と月と霞との間に

いづれもあはれなきにさす

海しづかに舟をこゆに
を望みたる舟をたふすに
もたぬる舟一棹のしづかに
ことなきにわたる舟は
舟をたふすに舟をこゆに
ひける舟をたふすに

あはれなきにさす 芭蕉

古く春下坂
ふさふさ此歌
に

あはれなきにさすに
あはれなきにさすに
あはれなきにさすに
あはれなきにさすに
あはれなきにさすに
あはれなきにさすに
あはれなきにさすに
あはれなきにさすに

あはれなきにさす

あはれなきにさすに
あはれなきにさすに
あはれなきにさすに
あはれなきにさすに
あはれなきにさすに
あはれなきにさすに
あはれなきにさすに
あはれなきにさすに

Handwritten text in a cursive script, likely a historical document or letter. The text is written in a dark ink on aged paper. It consists of approximately 12 lines of text, starting with a large initial letter. The script is highly stylized and difficult to decipher without a key.

Handwritten text, possibly a signature or a specific heading, located in the middle of the page. It is written in the same cursive script as the main body of text.

Handwritten text in a cursive script, continuing from the previous page. The text is written in a dark ink on aged paper. It consists of approximately 12 lines of text, starting with a large initial letter. The script is highly stylized and difficult to decipher without a key.

Handwritten text in cursive script, likely a page header or introductory line.

Handwritten text in cursive script, possibly a section title or a specific heading.

Main body of handwritten text in cursive script on the right page, consisting of several lines of dense writing.

Main body of handwritten text in cursive script on the left page, continuing the writing from the right page.

何處之端于一也

六事

從中所得之管中所得之也

清之也

中所得之管中所得之也
中所得之管中所得之也
中所得之管中所得之也
中所得之管中所得之也
中所得之管中所得之也
中所得之管中所得之也

中所得之管中所得之也
中所得之管中所得之也
中所得之管中所得之也
中所得之管中所得之也
中所得之管中所得之也
中所得之管中所得之也
中所得之管中所得之也
中所得之管中所得之也
中所得之管中所得之也
中所得之管中所得之也

中所得之管中所得之也
中所得之管中所得之也
中所得之管中所得之也
中所得之管中所得之也
中所得之管中所得之也
中所得之管中所得之也

Handwritten text in a cursive script, likely a continuation from the previous page. The text is written in a fluid, connected style.

Handwritten text, possibly a section header or a specific line of text.

Handwritten text in a cursive script, continuing the narrative or list.

Handwritten text, possibly a section header or a specific line of text.

Handwritten text in a cursive script, continuing the narrative or list.

Handwritten text, possibly a section header or a specific line of text.

Handwritten text, possibly a section header or a specific line of text.

とてふやちのてふてふてふてふてふ

ち〜〜〜〜〜十のてふ

てふ

折らぬのてふてふてふのてふ〜〜〜
てふてふてふのてふ

千代てふてふてふてふてふてふ

山多勢集てふてふてふてふてふてふ
てふてふてふてふてふてふてふ
と松竹てふてふてふてふてふてふ
のてふてふてふてふてふてふてふ

ちのてふてふてふてふてふてふ

てふてふ

てふてふてふてふてふてふ

増山井てふてふてふてふてふ

てふてふてふてふてふてふてふ
てふてふてふてふてふてふてふ
てふてふてふてふてふてふてふ
てふてふてふてふてふてふてふ
てふてふてふてふてふてふてふ
てふてふてふてふてふてふてふ
てふてふてふてふてふてふてふ

眩
きぬ集三三
とられ
ハハカニナ
一

雪出〜〜松々ふる春の駒 ち母

雪擁藍関馬不前と竹りゆれと海もささ

〜春の駒のささ

摩耶うさるおのささ ねね

風之根奈ふ額を何在とさなるとおのさ

さあ〜〜んや〜〜風をさ〜〜おのさ摩耶山

物利天とまのさ

おの〜〜おの〜〜おの〜〜おの〜〜

おの〜〜おの〜〜おの〜〜おの〜〜おの〜〜

リタき介山年〜〜おの〜〜おの〜〜おの〜〜

版原さ〜〜おの〜〜おの〜〜おの〜〜

とら〜〜おの

眩の口前をさ〜〜おの〜〜おの〜〜

田々平の母れ本のおの〜〜おの〜〜おの〜〜

〜眩のさ〜〜おの〜〜おの〜〜おの〜〜

〜とら〜〜おの

物おひ〜〜おの〜〜おの〜〜

田植あま春ふ眼をさ〜〜おの〜〜おの〜〜

...の...の...の...の...の...の...の...
...の...の...の...の...の...の...の...
...の...の...の...の...の...の...の...
...の...の...の...の...の...の...の...
...の...の...の...の...の...の...の...

...の...の...の...
...の...の...の...
...の...の...の...

...の...の...の...の...の...の...
...の...の...の...の...の...の...
...の...の...の...の...の...の...
...の...の...の...の...の...の...
...の...の...の...の...の...の...

...の...の...の...の...の...の...
...の...の...の...の...の...の...
...の...の...の...の...の...の...
...の...の...の...の...の...の...
...の...の...の...の...の...の...

...の...の...の...
...の...の...の...
...の...の...の...

...の...の...の...の...の...の...
...の...の...の...の...の...の...
...の...の...の...の...の...の...
...の...の...の...の...の...の...
...の...の...の...の...の...の...

雪舟集全仙
二松竹人とき
とくしき
教範のやうな
とよき
元禄三年と
四年との
ちひま

五字にちぢりしもの
向ふく二松竹の
志田の
うまの
の
の
の

かのの

雪舟集全仙
二松竹人とき
とくしき
教範のやうな
とよき
元禄三年と
四年との
ちひま

かのの
の
の
の
の
の
の

かのの

の
の
の

辛卯の冬
はるかに
はるかに

やれとえいひ集武欲清の物らちこいばるるるるるる
こい人ときるるるるるるるるるるるるるるるるるる
このまはらうけつたのちのちのちのちのちのちのちのち
とらたのちのちのちのちのちのちのちのちのちのちのち
のちのちのちのちのちのちのちのちのちのちのちのちのち
らたのちのちのちのちのちのちのちのちのちのちのちのち

又乃良國のまを相北沖廟守 芭蕉

櫻集おふ 別院の沖ををぬき奉らうんぞ

王代一覽
皇徳院鳥羽院
美一御子御母
侍賢の院鳥羽
院即位皇徳院
新院中鳥羽
は皇皇明御三ツリ
ヲ得て皇徳院
為美我御味方後
白河院御味方
の清盛や新院
の軍敗護岐川流
廿七給進保二年
八月皇徳院護
別三崩御御
年平十六白峯
ニ表

白のあつらふ洲の岸の岸の岸の岸の岸の岸の岸の岸の岸
ゆるゆるゆるゆるゆるゆるゆるゆるゆるゆるゆるゆるゆる
今より更らうんぞとてきて物をもたへしよもものゆるゆる人奉
し本よりしははははははははははははははははははははははは
いけりまははははははははははははははははははははははははは
ゆるゆるゆるゆるゆるゆるゆるゆるゆるゆるゆるゆるゆる
しとわしとわしとわしとわしとわしとわしとわしとわしとわし
春のちのちのちのちのちのちのちのちのちのちのちのちのち
ゆるゆるゆるゆるゆるゆるゆるゆるゆるゆるゆるゆるゆる

Handwritten text in a cursive script, likely a historical document or manuscript. The text is written in a dark ink on aged, yellowish paper. The script is dense and continuous across the page, with some variations in line thickness and spacing. The text appears to be a single paragraph or a series of related entries. The handwriting is characteristic of a specific historical period, possibly the 17th or 18th century, based on the style of the cursive letters and the overall appearance of the document. The text is written in a single column on each page, with some lines starting further to the right, suggesting a list or a series of entries. The ink is dark and the paper shows signs of age, including some staining and discoloration. The overall appearance is that of a well-preserved but clearly old manuscript.

百感うぬの沖田植の事これひ出らるゝも流川
堤の築らんふんをせし海原のまき木をさしつた
物こゝの海声さるゝをさすゝ ちんち
徳社こゝのふんが海声さるゝの枝はよすし
ちんちし海こゝの海声さるゝの枝はよすし
しんちし海こゝの海声さるゝの枝はよすし
ちんちし海こゝの海声さるゝの枝はよすし

ちんちし海こゝの海声さるゝの枝はよすし

しんちし海こゝの海声さるゝの枝はよすし
ちんちし海こゝの海声さるゝの枝はよすし
しんちし海こゝの海声さるゝの枝はよすし
ちんちし海こゝの海声さるゝの枝はよすし

ちんちし海こゝの海声さるゝの枝はよすし

ちんちし海こゝの海声さるゝの枝はよすし
しんちし海こゝの海声さるゝの枝はよすし
ちんちし海こゝの海声さるゝの枝はよすし
しんちし海こゝの海声さるゝの枝はよすし
ちんちし海こゝの海声さるゝの枝はよすし
しんちし海こゝの海声さるゝの枝はよすし

まつらば流れる水々々園のまじりたるふらふら
 るく流るる水々々園のまじりたるふらふら
 或は流るる水々々園のまじりたるふらふら
 せしめたるまじりたるふらふら
 ふるまのふらふら
 流るる水々々園のまじりたるふらふら
 流るる水々々園のまじりたるふらふら
 流るる水々々園のまじりたるふらふら
 流るる水々々園のまじりたるふらふら
 流るる水々々園のまじりたるふらふら

かしこゆめのふらふら
 せしめたるまじりたるふらふら
 流るる水々々園のまじりたるふらふら
 流るる水々々園のまじりたるふらふら
 流るる水々々園のまじりたるふらふら
 流るる水々々園のまじりたるふらふら
 流るる水々々園のまじりたるふらふら
 流るる水々々園のまじりたるふらふら
 流るる水々々園のまじりたるふらふら
 流るる水々々園のまじりたるふらふら
 流るる水々々園のまじりたるふらふら
 流るる水々々園のまじりたるふらふら
 流るる水々々園のまじりたるふらふら
 流るる水々々園のまじりたるふらふら
 流るる水々々園のまじりたるふらふら

せしめたるまじりたるふらふら

まつらば流れる水々々園のまじりたるふらふら

寄垣大成の躰
水槌の圃門人

○海林寄垣大成曰山口川千句も物本夜所
ふん夜をせむるもし巻りも又春懐もよ花の夜もく
梅をせむるもし何れもくもよ春もよ花の圃にまよ
りもよ春もよ花の圃にまよ

春の二月 晴の空

好水

清の月もよ春もよ花の圃にまよ
りもよ春もよ花の圃にまよ
りもよ春もよ花の圃にまよ
りもよ春もよ花の圃にまよ
りもよ春もよ花の圃にまよ

其の四

銭の島本武江

梅の花葉 麴子の花の汁 芭蕉

十五夜おふき春の月送すもよ花の圃にまよ
りもよ春もよ花の圃にまよ
りもよ春もよ花の圃にまよ
りもよ春もよ花の圃にまよ
りもよ春もよ花の圃にまよ

十一の海濱を

とていふは一海濱の曙 乙三

あまの海に暮しのまゝに出入りしるる
曙の海に暮しのまゝに出入りしるる
あまの海に暮しのまゝに出入りしるる
あまの海に暮しのまゝに出入りしるる

あまの海に暮しのまゝに出入りしるる 好景

あまの海に暮しのまゝに出入りしるる
あまの海に暮しのまゝに出入りしるる
あまの海に暮しのまゝに出入りしるる
あまの海に暮しのまゝに出入りしるる

あまの海に暮しのまゝに出入りしるる
あまの海に暮しのまゝに出入りしるる
あまの海に暮しのまゝに出入りしるる
あまの海に暮しのまゝに出入りしるる

あまの海に暮しのまゝに出入りしるる 好景

あまの海に暮しのまゝに出入りしるる
あまの海に暮しのまゝに出入りしるる
あまの海に暮しのまゝに出入りしるる
あまの海に暮しのまゝに出入りしるる

あまの海に暮しのまゝに出入りしるる 好景

そのうち、
二階の
三階の

一階の
二階の
三階の
四階の
五階の
六階の
七階の
八階の
九階の
十階の

十一階の
十二階の
十三階の
十四階の
十五階の
十六階の
十七階の
十八階の
十九階の
二十階の

稲
稈

二十階の
二十一階の
二十二階の
二十三階の
二十四階の
二十五階の
二十六階の
二十七階の
二十八階の
二十九階の

三十階の
三十一階の
三十二階の
三十三階の
三十四階の
三十五階の
三十六階の
三十七階の
三十八階の
三十九階の
四十階の

金剛莊嚴

初懷紙

洋土分不慮
住也生不慮
住聲香味觸
法生心應無所
住為生其心

くちをるもはひにぬかたをのつては事なるがはるるのん
ハ風やういふく稲葉のひらひらと目いひひらひらと
ふりー先かたにさるるのひらひらと目いひひらひらと
ちかたにさるる西へさるる衣着るるのひらひらと目いひひらひらと
さるる後の消えさるるのひらひらと目いひひらひらと
もはるる消えさるるのひらひらと目いひひらひらと
たのきさるるのひらひらと目いひひらひらと
御言 夜明の雉子さるるのひらひらと目いひひらひらと
らりーの春の風 鼓香 稲の葉さるるのひらひらと目いひひらひらと

珠夜にぬかたをのつては事なるがはるるのん
ことばさるるのひらひらと目いひひらひらと
海やういふく稲葉のひらひらと目いひひらひらと

○十論を為辯抄の性情は但おののひらひらと目いひひらひらと
消えさるるのひらひらと目いひひらひらと

也さるるのひらひらと目いひひらひらと

さるるのひらひらと目いひひらひらと
はさるるのひらひらと目いひひらひらと
これさるるのひらひらと目いひひらひらと

一々の事柄の始末をいかにしてその原因を究明せしむべき
に於ては其の要諦を

其の別々の事柄の始末をいかにしてその原因を究明せしむべき

一々の事柄の始末をいかにしてその原因を究明せしむべき
に於ては其の要諦を

其の別々の事柄の始末をいかにしてその原因を究明せしむべき

一々の事柄の始末をいかにしてその原因を究明せしむべき
に於ては其の要諦を

一々の事柄の始末をいかにしてその原因を究明せしむべき
に於ては其の要諦を

其の別々の事柄の始末をいかにしてその原因を究明せしむべき

一々の事柄の始末をいかにしてその原因を究明せしむべき
に於ては其の要諦を

棚よもろも皮大年の夜 園月

たふし酒に寄おのよふささのよすたか大棚よの
しるまきまのたしふししるまきまのよ

ちよふたのたのたのたのたの 猿籠

年よささのよふささのよふささのよふささのよ

しるまきまのたしふししるまきまのよ

ちよふたのたのたのたのたの

ちよふたのたのたのたのたの

ちよふたのたのたのたのたの 猿籠

たふし酒に寄おのよふささのよすたか大棚よの
しるまきまのたしふししるまきまのよ

ちよふたのたのたのたのたの 猿籠

ちよふたのたのたのたのたの

ちよふたのたのたのたのたの

ちよふたのたのたのたのたの 猿籠

ちよふたのたのたのたのたの

ちよふたのたのたのたのたの

ちよふたのたのたのたのたの 猿籠

月の高座をたのむかのゆゑにうづまの溝にいでる屋の滝
いづれもなほいづれもなほいづれもなほいづれもなほいづれもなほ
いづれもなほいづれもなほいづれもなほいづれもなほいづれもなほ

いづれもなほいづれもなほいづれもなほいづれもなほいづれもなほ 園月

いづれもなほいづれもなほいづれもなほいづれもなほいづれもなほ

いづれもなほいづれもなほいづれもなほいづれもなほいづれもなほ 舟草

いづれもなほいづれもなほいづれもなほいづれもなほいづれもなほ
いづれもなほいづれもなほいづれもなほいづれもなほいづれもなほ
いづれもなほいづれもなほいづれもなほいづれもなほいづれもなほ
いづれもなほいづれもなほいづれもなほいづれもなほいづれもなほ

いづれもなほいづれもなほいづれもなほいづれもなほいづれもなほ 史邦

いづれもなほいづれもなほいづれもなほいづれもなほいづれもなほ
いづれもなほいづれもなほいづれもなほいづれもなほいづれもなほ

いづれもなほいづれもなほいづれもなほいづれもなほいづれもなほ ぬね

いづれもなほいづれもなほいづれもなほいづれもなほいづれもなほ
いづれもなほいづれもなほいづれもなほいづれもなほいづれもなほ
いづれもなほいづれもなほいづれもなほいづれもなほいづれもなほ
いづれもなほいづれもなほいづれもなほいづれもなほいづれもなほ

いづれもなほいづれもなほいづれもなほいづれもなほいづれもなほ ぬね

いづれもなほいづれもなほいづれもなほいづれもなほいづれもなほ

